

Exploring the Gap

スキマを

らら

ひひ

関連イベント

オープニング・トーク

出展作家によるトークを実施します。

日時 | 2025年5月3日(土・祝) 14:00-16:00

会場 | @KCUA およびキャンパス内屋外

小山田 徹「ウィークエンドカフェ」

会期中の毎週末に、ゆるやかに集うことのできる共有空間が出現します。飲食物の持ち込み歓迎。トーク、「移動式芸術資源循環センター」、「イヌ場」など*も開催予定。

*「イヌ場」：イヌと人による共有空間を作ること、多種共生のあり方について考えるプロジェクト。乾久美子曰く、「まさにコモニングそのもの」。

(開催時間は目安です。天候などの理由により、変更の可能性もあります。ご了承ください)

日時 | 2025年5月3日(土・祝)、9日(金)、16日(金)、23日(金)、

6月6日(金)、14日(土)、21日(土)

金曜日は17:00-20:00頃、土曜日は11:30-20:00頃開催。

会場 | @KCUA 南側窓面付近・小山田徹作品周辺(屋外)

●同時に行われるイベント(予定)

・移動式芸術資源循環センター(副産物産店)
ウィークエンドカフェ開催日程の13:00-20:00に小山田徹作品周辺に出現します(5月9日(金)を除く)。

・イヌ場*
5月9日(金)、6月14日(土)に小山田徹作品周辺などで開催予定。

・トーク
5月3日(土)のオープニング・トークのほか、複数日程で小山田徹作品周辺で開催予定。

(最新情報は、順次@KCUA ウェブサイトにてお知らせします)

副産物産店ワークショップ

「Balance and Fixation——彫刻のための協働行為、あるいは協働のための彫刻行為」

日時 | 2025年5月24日(土) 15:00-17:00

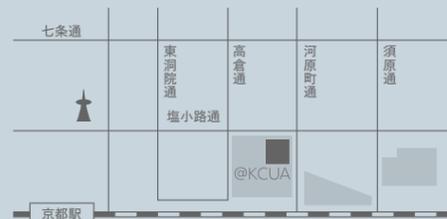
会場 | @KCUA・副産物産店作品周辺

(要事前申込・詳細は@KCUA ウェブサイトでご確認ください)

「共生と分有のトポス」映像上映

本展会場内で「共生と分有のトポス：芸術と社会の交差領域におけるメディエーター育成事業」(2024年度)の生物多様性をテーマとしたワークショップ(講師：太田陽介、鷲田悟志ほか)の記録映像(撮影・編集：片山達貴)を上映します。

ACCESS



京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA

〒600-8601 京都市下京区下之町57-1 京都市立芸術大学 C棟1F

Phone: 075-585-2010 / E-mail: gallery@kcuu.ac.jp

https://gallery.kcuu.ac.jp

JR / 近鉄 / 地下鉄京都駅 徒歩6分

京阪七条駅 徒歩10分

バス：「塩小路高倉・京都市立芸術大学前」バス停下車すぐ

田中 功起 Koki Tanaka

乾 久美子 Kumiko Inui

副産物産店 Byproducts Market

小山田 徹 Toru Koyamada

京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA

2025.5.3 sat. - 6.22 sun.

10:00-18:00 入場無料

※月曜休館、5月5日(月・祝)は開館、翌平日の5月7日(水)を休館

主催 | 京都市立芸術大学 助成 | 芸術文化振興基金

企画 | 藤田瑞穂(京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA チーフキュレーター/プログラムディレクター)

京都市立芸術大学
Kyoto City University of Arts

@KCUA



世界のあちこちで分断と対立が深刻化し、先行きが不透明な時代にわたしたちは生きています。そうしたなかで、多様な背景をもち、考え方もそれぞれに異なる人々が歩み寄り、共に生きていくためにはどうすればよいのでしょうか。コロナ禍に起きたさまざまな変化は、社会の効率化を加速させました。しかし、過剰な効率主義は、人と人との関係性を少しずつ、希薄にしていってしまいます。共に生きることを目指すためには、まず、場を共にすることからはじめなければなりません。丁寧に時間をかけ、対話を重ねておたがいを知ろうとし、学び合い、認め合うことの大切さを、いま、あらためて考える必要があります。本企画では、人々が時間と場所を共にし、対話を重ねることによって広がる可能性について、4組の作品や実践を通して考察します。



田中功起は、「共に生きるとは何か」というテーマのもと、人々の協働や共同体のあり方を問い直す活動を長年続けてきました。本企画では、2017年にミュンスター彫刻プロジェクトで発表された《Provisional Studies: Workshop #7 How To Live Together, And Sharing The Unknown》(一時的なスタディ：ワークショップ7 未知なものを共有し、いかにしてともに生きるか)をとりあげます。この作品は、さまざまな文化的背景を持った近隣住民8名が参加した9日間のワークショップの記録映像を中心に構成されています。このワークショップは、ロラン・バルトがコレージュ・ド・フランスで行った講義のノート『いかにしてともに生きるか』に着想を得たものです。バルトは、ギリシアのアトス山にある修道院の、同じ空間にありながら、それぞれのリズムを保った生活形態「イデオリトミー(固有のリズム)」に共生の可能性を見出していました。ワークショップの参加者たちは、数名のファシリテーターとの協働による複数のプログラムに取り組み、議論を交わします。合計で4時間半を超える記録映像からは、むしろ共に生きることの難しさを感じられるかもしれません。はたして本当に共に生きることはできるのか、映像の前に立つ鑑賞者は、あらためてその問いに向き合うことになるでしょう。

田中功起 Koki Tanaka



Provisional Studies: Workshop #7 How to Live Together and Sharing the Unknown, 2017.

乾久美子 Kumiko Inui

京都市立芸術大学及び京都市立美術工芸高校移転整備工事 乾・RING・フジワラボ・o+h・吉村設計共同企業体(以下、京芸設計JV)の代表である建築家の乾久美子は、日常で、また仕事先で出会った、誰がつくったのかわからないけれど、生き生きとして、人の温もりを感じることでできるさやかな場所を「小さな風景」と呼び、協力者と共に膨大な数の記録を撮りためてきました。本企画で紹介するこれらの「小さな風景」に、乾は commons 的なもの、場所への愛着、居心地、共有の感覚の源泉などを見出し、日々の学びとしています。なかには、ある commons のなかに、また別の commons が生まれ、共存しているものもあります。このように一時的に発生する commons は、comonings と呼ばれます。こうした日常的でローカルな commons/comonings の事例を蓄積しながら活動してきた乾は、建築をつくるのではなく「おく」と表現しています。その言葉には、建築とは空間を与えるものではなく、その場に生きる人々と相互に関係し、その人々が生み出す「小さな風景」と共にあるものとする建築家の思考が表れています。



よりくつろげる美術館へ/横浜美術館リニューアル/空間構築、サイン計画 (撮影: 森中康彰)



「共生と分有のトボス」ワークショップ「図書館をラーニング・commonsにする」(京都市立芸術大学, 2024年)

スキマをひらく Exploring the Gap

小山田 徹 Toru Koyamada

昨年度まで本学美術学部彫刻専攻の教員を務め、この4月に本学理事兼学長に就任した小山田徹は、数十年にわたって、「共有空間の獲得」をテーマとした活動を続けてきました。ホームパーティーが外に広がっていったかのような、人々がゆるやかに集う「カフェ」、小さな焚き火のもとに集う場などの共有空間は、対話や議論が生まれ、育まれていく場所となっています。それらはすべて与えられた空間ではなく、ばらばらな人々が集い、それぞれ固有のリズムを保ちながら、自分たちがつくったものとして愛する空間です。これらもまた、イデオリトミックな共生の場ということができるでしょう。本企画では、約15年間ものあいだ、小山田が作り続けてきた共有空間で、その役割を変化させながら寄り添ってきた小屋状の立体作品《浮遊博物館》を、新キャンパスに「おく」ところからはじめます。実はこの作品は、ようやくその使命を全うして「副産物」になりかけていたところを修復され、復活したものです。そして展示会会期中の週末には、誰もにひらかれ、それぞれが思い思いに過ごすことによって育つ共有空間「ウィークエンドカフェ」が出現します。



「いま、バリアとはなにか」展示風景 (せんだいメディアテーク, 2010年)



《ウィークエンドカフェ》(崇仁地域, 2015年/photo: KentaHasegawa)



矢津吉隆、山田毅による「副産物産店」は、京芸設計JVの機運醸成・リサーチチームの活動から生まれたアーティストユニットです。制作の現場から出る廃材など、いずれは捨てられる運命にあったモノたちを「副産物」と呼び、それらを回収・活用・販売する活動を行ってきました。また、資材の循環を目指した「芸術資源循環センター」、副産物の楽器を用いて演奏を行う「副産物楽団ゾンビーズ」など、基本の活動から派生した複数のプロジェクトを手がけています。本企画では、乾の「小さな風景」と、元の素材の周囲にかつてあったもの、あるいは用途に着目しながら新たな風景を作ろうとする副産物産店の作品が重なり合うコラボレーションのゾーンを入口として、「副産物」の循環と活用をさまざまな角度から体験できる場を展開します。



ACKキッズプログラム・ワークショップ「副産物産店で作品(商品)をつくらう」(撮影: 森昭人)



《芸術資源循環センター》(2025年)



(撮影: 片山達貴)



副産物産店 Byproducts Market

(*の画像) 撮影: 吉本和樹

社会の隙間をひらくことで共有空間が生まれ、その場集ってきた人々によって社会とのつながりができていきます。そして一時的にでも共にいることで、学び合い、認め合い、委ね合う関係性が築かれていくのです。共に生きることの可能性や未来を、本当の意味でひらいていくのは、そうして生まれてくる共有空間を、人々が愛をもって「小さな風景」に育てていくことの積み重ねなのかもしれません。